只見短歌会　八月詠草

大塚栄一　指導

若きらが旅行に行きて広き家高校野球の音を高くす　古川　英子

やみくもに図鑑を引きて花の名を知れば匂ひを削ぐ思ひする　小倉キミ子

立秋となりて稲穂も揃ひつつ雀おどしの爆音聞こゆ　関谷登美子

深々と母の仏の前に眠る末孫に涙溢れて止まず　五十嵐夏美

花買ひし客を送れば助手席に撫子の香を残し降りゆく　新国由紀子

救急車で行きたる従弟一夜にて声なき帰宅諾ひ難し　渡部ゆき子

夫の墓洗ひつつ仰ぐ山高し逝きてより二十三回忌となる　馬場　八智

操り返し小走りをして動悸する胸にわが手を孫は触れさす　目黒　富子

黒き薔薇咲きしと声をあげし孫鉢植ゑを臥す窓の辺に置く　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　九月例会

目黒十一　指導

秋暑し飴の匂いの切手貼る　順子

女の子寝返る髪へ秋立ちぬ　信

夏山や寝転んで見る流れ雲

久々に旧友と遇う盆踊り　修一

俎板にやっと載せたる西瓜かな　リウコ

秋の夜や酢豚定食平らげて

新聞一枚枕を隠す昼寝かな

庭中に咲き誇りたるクロッカス　一穂

月明や狸出て来る黍畑　都

雨音や木陰にそっと盆送り

立ち話ようやく終る夏木立

幸せと不足無き日々原爆忌　敦子

今朝の秋大豆の花の紫に　礼

鰯雲ラジオ体操声上げて

鳥か虫か声それっきり秋初め

日の入りを待ち畝立てる残暑かな　吉児

湯上がりのほのかな火照り月の宿　恒夫

美術の秋郷土の絵師の「雪螢」

お供えの竹箕豊かや今日の月

遠山に寝釈迦の顔や花芒　邦男

会場に流れるピアノ秋涼し

鳥威し人影遠き三代目